**説教20230129列王記下4：18-21，32-37マルコ1：29-39「悪霊を追い出せ」**

**今、ちまたでは、「ボッチザロック」というアニメが大人気です。私もインターネットで見ている最中です。又、近くの本屋さんでもとになる漫画本を買おうと思ったら、どこも売り切れで、その人気が本物であることが分かりました。今、あらゆる年代層の人たちがこの「ボッチザロック」に引き寄せられています。それは、現代社会で、孤独、孤立ということが問題になったり注目をされていることと無関係ではないでしょう。**

**孤独孤立ということは、深刻かつ微妙なことがらで、良いことして語られることもありますし、悪いことととして語られることもあります。孤独孤立は、人が独自の思いや考えを培っていく上で不可欠な大切な時間である、とも言われ、又、孤立孤独は人の心を弱らせ人との関わりを失わせる有害な時間である、とも言われます。さて、どっちが正しいのでしょうか。私たちはこの問題に対する答えを一概には見いだせず、今なおその答えを見出そうと、必死でもがいていると言えるのではないでしょうか。**

**「ボッチザロック」の主人公の女の子はボッチちゃんと呼ばれ、本名は一人です。いわゆるボッチな生活をしている間に、バンド仲間を得て、友人たちや家族との新たな交わりが始まっていきます。しかし、このアニメの魅力は、ボッチちゃんがボッチ状態を抜けだしたところにあるのではありません。ボッチちゃんは何時まで経っても一人ですし、そうではないのです。このアニメの魅力は、人々の見方や社会の風潮が、ボッチであることにまつわる罪悪感や羞恥心を拭い去り、むしろボッチであることを積極的に認め、その良さを味わうことが出来ている点にあると思います。**

**さて、聖書では孤立孤独についてどのように語っているのでしょうか。聖書もまた、私たちの孤独孤立にまつわる罪悪感や羞恥心を拭い去ることが出来る書物です。そのことは主イエスキリストの出来事を見ていけば、明らかになります。イエス様は罪がない神の子でありながら、この罪多き地上にやって来られて、孤独ではなかったでしょうか。又、十字架に掛けられこれ以上にない罪悪感や羞恥心を味わわされた時、孤独を感じることがなかったのでしょうか。イエス様はその時々に、これ以上にないほどの孤独孤立を味わわれたに違いありません。しかし、イエス様の味わわれた罪悪感や羞恥心は、復活によって完全に拭い去られ、そこに新しい命が与えられたのでした。**

**今日は、イエス様が孤立孤独をどのように味わわれたかについて黙想しながら、聖書を読んで参りたいと思います。**

**マルコ福音書 1章 30節から**

**シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。**

**主なる神は、私たち人間を癒し慰める神様です。詩編には、人間が主なる神にすがりついて、癒しと慰めをひたすら祈り願う様がそこここに詠われています。主なる神は、私たちが情愛をもってすがりつくことを喜ばれるお方です。主なる神は、ダビデが「主よ、あなただけは遠く離れないでください。私の力の源よ、急いで助けに来てください。」といって、独占的にすがりついて来ることを、さぞかし喜ばれたのではないでしょうか。なぜならば主なる神は、熱情の神であり情愛が深い神であるからです。**

**その熱情の神の姿は、イエス様がシモンのしゅうとめを癒された場面に、その通り現れています。そばにやって来られたイエス様に彼女は助けを求め、手を取られて起こされ、そうして彼女は癒されたのでした。彼女は、イエス様のことを好きになり、又イエス様を連れて来きた一同のことも好きになって彼らをもてなしたのでした。**

**この癒しの場面には、主イエスが極めて人間的な仕方で人々を癒された様が記されています。主イエスは、その場に現れ、手に手を取って人を癒される方です。そしてその場を和ませ、その場を聖霊で満たして人々を交わり（コイノニア）へと導くのです。**

**もし仮に、主イエスが、ただ単に全知全能の神であるだけならば、いちいち病人のもとを訪ねて手を差し伸べるといったことはしないで、ある瞬間に全世界に癒しの光を放って、一瞬にして全世界を癒し、回復させるということもおできになるでしょうが、少なくとも今のところはそのような御業はなされてはいないのです。**

**主イエスが天に昇られた今の世におきましては、いちいち病人のもとを訪ねて手を差し伸べるというこの癒しの業は、私たち一人ひとりがイエス様から託された私たちの業になっているのです。**

**さて、癒しの業を行われるイエス様のもとには、大勢の人たちが連れて来られ、イエス様は大勢の人たちを癒し、又、多くの悪霊を追い出され悪霊を封じられました。イエス様の癒しの御業はこの様にして、口づてに広まり、人々が次々に癒され、そしてその地域から悪霊が追い払われ、そこは聖霊に満たされる地域になったのでした。この様な成り行きをみれば、イエス様が、人間一人一人に対する癒しをとても大事にされていることがお分かりになることでしょう。**

**さて、この様に情愛が深い慈しみの神であるイエス様ですが、その力の源は何処からきているのでしょうか。いやいや、イエス様は神様なのであって、まことの光なのであって、イエス様ご自身がその源であるのではないのか、という声も聞こえて来そうですが、神の子でもあられるイエス様は、決してそれだけではないのです。これは冒頭の孤独孤立ということとも関連付けられますが、イエス様は一人の時間を大切にし、その時間を味わわれた方です。**

**マルコ福音書1章 35節**

**朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。**

**イエス様はよく、この様に一人になってお祈りをされました。一人と言いましても、祈りと言うのは天にまします父なる神との会話なのですから、とりもなおさず二人であるのです。とにかくイエス様の地上での歩みにおきまして、イエス様は父なる神と絶えず会話をし続けることが不可欠であったのです。**

**この様に祈るイエス様の姿は、この世的に見れば、ひとりです。将にボッチ状態であります。しかし、その祈りの時間は、実は父なる神と会話する二人きりの大切な時間であり、父なる神に従順であるイエス様が、父なる神から癒しの力をも頂くことが出来る充電の時間であったと言えるでしょう。**

**この様に力の源である父なる神との祈りの時間をもったイエス様は力に満たされ、そこにまた御業を行う機会がやってきます。**

**1章 36節**

**シモンとその仲間はイエスの後を追い、見つけると、「みんなが捜しています」と言った。**

**そして力に満たされた、イエス様は、シモンに「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである」とお応えになり、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出されました。**

**ここで宣教という言葉が出て参りましたが、今の教会でも宣教と言う言葉がよく語られ、私たちは宣教することを勧められています。でも、イエス様でさへ、宣教するための力を父なる神との祈りの内に与えられたのですから、私たち人間こそ、宣教の力の源をもっと具体的に問い求めることが必要なのではないかと思います。言葉を変えて言えば、私たちは、すなわち（自分の身一つだけで頼むべきもののない）状態で宣教を開始しても、無理なのです。**

**いうまでもなく、私たちが宣教を進めていく上での力の源は、イエス様との祈りであり会話であります。祈りと言うのはこのように大勢でする祈り、また２人３人でする祈り、そして一人でする祈りと、多種多様であります、それは、私たちの生活の隅々に、根ざした営みであります。言葉を変えて言えば、あなたはどんな時も、イエス様と共に歩んで会話をしているということです。**

**ところで、イエス様は父なる神と二人きりでよく祈られましたが、その様子が聖書には記されています。二人きりの祈りなのですから、厳密にいえばその様子が第三者に知られることはないのですが、とにかく記されていますのでご紹介します。**

**ヘブライ人への手紙5章 7節**

**キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。**

**これがイエス様と父なり神とが二人きりで祈られた時の有様です。**

**昨年秋に、当教会に来られて、祈りについて講演をされた田中光先生のお話の中で、先生の父親が牧師であられましたが、時折一人で山に入っては、大声で祈っておられたということを語られましたが、このお父さんも、キリストの様に、父なる神との祈りの時間を持っていたのでしょう。**

**さて、イエスキリストの宣教は、今に至るまで、そして最後の時まで続けられます。その原動力は申し上げました通り、父との祈りであるのですが、少しその祈りの中身のことも語って参りましょう。**

**私たちの祈りの中身と言うのは、単純に言えば、私を死なないようにして下さい。私に永遠の命を恵んで下さい、という主なる神に対する懇願です。その願いに連れ立って、私を癒し慰めて下さいという祈りもあります。**

**多くの祈りがささげられる中で、私を死なないようにして下さい。私に永遠の命を恵んで下さいという祈りがその中心にあるのは、その祈りが、最後の時まで、そして地の果てまで捧げ続けられる祈りであるからです。**

**この祈りは最後の時まで成就しないゆえに、激しい叫び声をあげ、涙を流しながらするような、果てしなく又重い祈りであるでしょう。私たちはその重さから逃れ、もう少し現実味が感じられる、この世でのこの身の癒しと慰めばかりを祈るようになりがちであります。**

**なぜならば、今日のマルコ福音書の箇所で見てきましたように、この身のこの世における癒しと慰めということの方が、永遠の命を神から恵まれるということに比べて、現実味があり成就しやすいと私たちは思いがちだからです。**

**しかし、そこに思わぬ落とし穴があることに私たちは気を付けないといけません。よく今日の聖書箇所の註解書で、人々はイエス様に近づいて、感謝することもなくただ我が身が癒される為だけに、イエス様を利用し始めたのだ、という様に注解する書物に出くわします。確かに、そのようにイエス様を利用することになる危険性は感じられなくもありません。但し、人がイエス様に近づくということは全く良いことですので、問題は癒された後の私たちの態度にかかっているでしょう。私たちが、もし仮に、この世で癒されたのだから願いは成就しました、もう父なる神に祈る必要もありませんと思ってしまって、祈ることを止めてしまえば、それはイエス様を癒しという目的のために利用したことになってしまいます。**

**言うまでもなく、この世で私たちの心身が癒されということは、その出来事によって私たちが益々、命の与え主である主イエスに感謝と賛美を捧げるようになり、イエス様と共に永遠に生きられるという恵みを宣教する業を強められることに他ならないのです。**

**お祈り**

**エルサレムの平和のために祈れ。「あなたを愛する人々が安らかであるように。あなたの城壁の内に　平和があるように。あなたの宮殿の内が　平穏であるように」（詩篇122:6〜7）**

**父なる神よ、あなたはこの私がどこにいましても、喜んで私と二人でのお祈りに応じて下さいます。その大いなる慈しみと憐みに感謝し、あなたを賛美します。あなたの思いは私の思いをはるかに超えて、永遠の命の祝福を与えられるほどに熱情に溢れています。どうか私が恐れをもって、しかし怖気づくことなくあなたとの祈りの時を守っていくことが出来ますように。**

**あなたは二人三人とあなたを信じる者が集まる処に、あなたの平和を与え、私たちが平穏に過ごしていけると言われました。その御言葉を信じ、私たちがいつも祈り合って平和のうちに過ごしていくことが出来るようにして下さい。**

**今、世界中で憎悪や傲慢によって戦争、争い、いじめ、分断が引き起こされています。どうか、世界の教会を、一つにし、私たちが心を合わせて、あなたを信じることが出来るように、聖霊を送り聖霊で私たちを満たして下さい。悪霊を追い出し、私たちが暮らす社会を、あなたの愛に従うものとならしめてください。**